

ご近所さんで助け合う

My Sweet Home Town

私たちのよりどころ



郊外住宅地の質 高める努力を

夢のマイホームの象徴とも言える一戸建て住宅が並ぶ郊外住宅地。高度成長期以降、民間事業者によって、京都周辺や滋賀県の自治体でも爆発的に開発されてきたその多くが今、住民の高齢化と減少に直面し、どう維持するかが課題となっている。

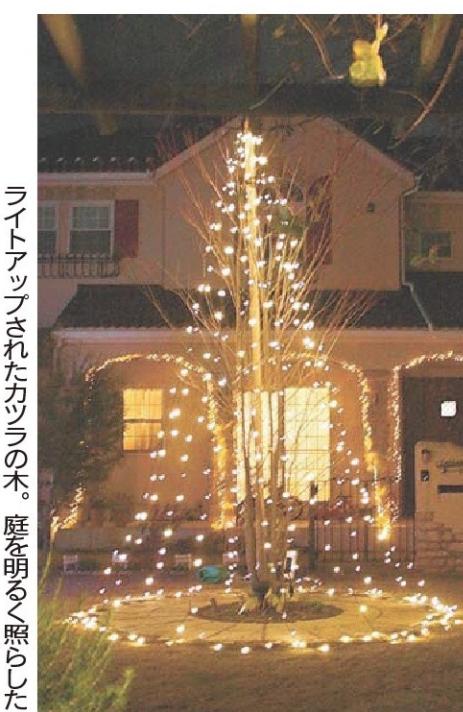
郊外住宅地は一気に造成され、入居者の年齢層が一様になりがち。多くは「団塊の世代」で、70歳に手が届こう

夢のマイホームの象徴とも言える一戸建て住宅が並ぶ郊外住宅地。高度成長期以降、民間事業者によって、京都周辺や滋賀県の自治体でも爆発的に開発されてきたその多くが今、住民の高齢化と減少に直面し、どう維持するかが課題となっている。

著書「郊外の衰退と再生」で再生に必要な施策として、空き家台帳を整備する△高齢者向け交通システム(コミュニティバスなど)へ移行する△近居住する子世代を持つ居住者を把握する△空き地の発生をポジティブに見る(駐車場への転用など)――などを挙げる。

「住民の世代をバランスよく混在させることが大事」。立命館大政策科学部の吉田友彦教授(都市計画)はい

ライトアップされたカツラの木。庭を明るく照らした



同じ町内の中古住宅に家



5戸が共有する庭は子どもたちの格好の遊び場にもなる。草木の手入れは住民たちが協力して担う(近江八幡市丸の内町)

③「共有庭」を図んで

近江八幡市の南西にある住宅地、丸の内町の「プラザスタイル」と名付けられた一角。本来は宅地となる1区画が、周りの5戸が共同所有する庭となっていました。事業主の村田興産(京都市南区)が宅地分譲開始から30年がたつた2005年、「まちが循環していく起爆剤」と、採算度外視で新たに分譲した。

「一緒に住んでるから仲良くしようと、自然にそうなった。おいつ子、めいつ子がたくさんいるみたい」。住民の一人、村田ひろみさん(52)が言う。5家族の世帯主は30~50代。幼児が

洋館風の5戸に囲まれた芝生の上を、子どもたちが自転車で走り回る。そばで母親たちが井戸端会議をしながら見守る。中央に植えられたカツラの木は8年分

背が高くなり、年末にはイ

ルミネーションで彩られ

た。

芝生の上を、子どもたちが自転車で走り回る。そばで母親たちが井戸端会議をしながら見守る。中央に植えられたカツラの木は8年分

背が高くなり、年末にはイ